

陽気だより

図書出版 養徳社
〒632-0016
天理市川原城町388
Tel. 0743 (62)4503
fax 0743 (63)8077
http://www12.ocn.ne.jp/~youtoku/

No. 1 2007. 4. 15

昔の『陽気』から

『陽気』は、昭和24年5月の創刊、平成21年に60周年を迎えます。その足跡の一端を、昔の記事から振り返っていきます。

文学の天才が見た天理教

三島由紀夫氏 宗教と文学を語る
(昭和26年8月号の『陽気』より)

三島由紀夫氏の伯母が敬虔な天理教信者であることよって、天理教に対する氏の理解と認識は素人眼以上のものがある。伯母の導きによって、一度はわざわざお地場へ足を運んだというほどである。

記者は一日機会を得て伊豆大島で原稿を執筆中の氏を訪問し、天理教信仰ならびにその文学論の一端を伺うことが出来た。

三島 天理教に対しては宗教として一番の好意と関心を持っていきます。私の伯母という人は、親類中一番幸福な人なのです。本人もそう言うし、傍から見ても確かに幸福そうに感じられますが、物事に屈託がなく、非常に割り切っていますね。明るく朗かで、物慾というものが無い。私はこういう伯母の楽天性を通じて、

天理教は非常に明るい宗教だと思ふのです。私の親類は皆物慾が強くて、いがみ合いばかりしていますが、伯母だけは超然としています。記者 では伯母さんのことを話して下さい。その生活態度から、何かこう、ぐっと、信仰の力を感じさせられるような事柄がありませんか。それをお話し下さい。

三島 伯母はずっと海外で暮らしていました。御主人は大連の市長をしていました。夫が亡くなってから、終戦となつて内地へ引き揚げてきたのですが、非常に思い遣りの深い世話好きな人で、自分のことはほつておいても他人のお世話をせよとおられない人なのです。引き揚げのときも、何かと人の面倒を見つづけ、引き揚げ後も、その人達のことを面倒を見つけているのです。こういう気持は私は単なるギブ・アンド・テイク(お

かえしをして貰う為に施す)式の考えからではないと思ふのです。

記者 単なる道徳心からでもありませんね。

三島 性格からだつて生れないと思ふのです。こういうところが実にすぐれているのですね。だから私は比較的に恵まれている他の親類の中でも、この伯母が一番富んでいる人だと思ふのです。伯母のそういう解脱の境地には感心させられます。そして、そこから生れる楽天性の中に、心がひかれます。楽天主義も徹し切れればいいのですからね。人間として未発達なのではなくして、或は一切を超越する真理なのかも知れません。そういう伯母の信仰のゆかりで、先年お詣りもしました。

(つづく)



創刊号の表紙 (昭和24年)

こんな話、あんな話

教会本部の前を流れているのは布留川。今はかなりきれいになったが、以前は川底がすけて見えるほどの清流だった。

むかし話によると、川底の石に、冬になると青味をおびた柔らかい草のようなものがうっすらと張りつく。それを春先に取って、水で洗ってさらしておく。すると、ちょうど浅草ノリのようなものができて、ちよつとした香りと風味があり、吸い物などに浮かせて食べると風雅なものであった。

これを「寒の素海苔」といって、おぢばの名産になつていた。「かんのすのり なたほたる」と黒地に金文字で書かれた細長い看板が、現在の本通りの一角に長く掲げられていたという。



「看板とちらし」(天理参考館)より

教祖の面影

お仲やんの話

三島の村に、お仲やんという年老の産婆さんがいた。村でただひとりの、とりあげ婆さんであって、時々心安い人の髪結もしていたらしい。

家は、今の天理本通りの飲食店「成駒」の奥まったところにあった。

この人が（中略）いろいろな話をしていた中で、一番私の心に残ったのは、（中略）教祖に関する話であった。

「時々わたしは、教祖のところへお伺いして教祖のお髪をおあげしていました。ある日、それが夕方ので、もう薄暗くなってきた時のことです。教祖がわたしに、ちよつと手を休めておくれとおっしゃったので、お髪を梳いていた手をとめますと、教祖はお傍の方に、紙と硯を持ってくるようにとおっしゃった。早速お付きの方が仰せのように紙と硯を持って来られたところ、教祖はその紙にサラサラと何か字をお書きになつてゐるのです。あたりはもう暗うて字なんか書けるものやない。そ

れなのに教祖は午の明るいうらで書くように、何の淀みもなく、すらすらとお書きになつてゐる。こんなに暗うてもお見えになるんやろか、よう書けるもんやなあ、とわたしは思いましたんや」

それから、お仲やんは言うた。「そこでわたしは教祖に、何をお書きになつておられますかとお聞きしてみたんや。すると教祖は、にっこりお笑いになつて、

「今に、これを世界中の人が歌うようになるのやで」とおっしゃつたのです。世界中の人が歌う、そんなら何か子守歌でも書いてはるのか

など思つたんです。今考えると、それがみかぐらうたやつたんだつしやるなあ」

果たしてお仲やんの言うように、それがみかぐらうたであつたのか、それともおふでさきであつたのか、それは分からない。多分おふでさきであつたのでないかとも思うが、しかしお仲やんはみかぐらうたとひとり決めしてしたのであろう。―後略―

（『おぢは今昔ばなし』今村英太郎著・道友社新書より）

インフォメーション

最新刊のご紹介

3月26日に、『生き方メッセージ』（松宮守著 新書判・232頁 定価11840円）を発売しました。

『陽気』誌に平成16年から18年まで、野島良平のペンネームで連載したものに加筆して単行本にしたものです。

時々の社会の現象や、人の動きや思いについて、さまざま視点から書き綴つたエッセイ集です。



『消えたヤシの実』一万个沖繩緑化に賭けた男たち

昨年11月に発売した本書（小滝透著 四六判・236頁 定価11260円）は、戦後の沖繩本土復帰前後に展開された、沖繩とハワイを結ぶ壮大な「ひのきしん」の裏舞台を、現地取材を交えて綴つたものです。

かの戦争での沖繩の惨状、草木さえ焼き尽くされた地に、緑を蘇らせた。情熱に燃え

た男たちの夢が、いかにして実現していったのか……。

美しい挿絵と現地写真を交えた、読みやすい本です。



※支部からご購入くだされば、2割引（送料は当社負担）です。（電話0743・62・4503）

講演会のご案内

来る6月25日（月）午後2時より、おやさとかた南右第二棟「陽気ホール」において、第8回「陽気読者講演会」を開催します。

講師は、菅原圭悟先生（憩の家精神神経科前部長）。テーマは、「うつ病の早期発見、早期治療のコツ」です。

入場無料。開場は30分前です。身近な方へのサポートやおたすけの一助に……。

お願い

今月より「陽気だより」を発行することになりました。毎月、送らせていただきますので、各支部例会などの折、広く、養徳社からのお知らせとして皆様にお伝えくださいますよう、お願い申し上げます。ご意見・ご感想などもお寄せください。

養徳社

養徳社 よもやま話

★ある日の夕方、社の正面玄関のブラインドが六年目にしてこわれしました。修理にも手間取り、費用も約八万円もかかり、実に『陽気』代金の四七〇冊分です。増部して穴埋めしなけりや!!

★業務部に新人女性が入りました。天理高二部（炊事本部勤務）を経て、今年十九歳の青木加奈子さんです。趣味はクラシック音楽の鑑賞で、中・高時代吹奏楽クラブ出身。どうぞよろしく。

★小さくですがホームページを立ち上げています。検索サイトで「養徳社」と調べていただきましたら出てきますので一度ご覧ください。まだ読んだことのない本と出会えるかも知れませんが……。ご注文・書籍の読后感、ご意見などお気軽にお寄せください。

★メールマガジンも発行しています。養徳社からのフレッシュな情報を配信していますので、お気軽にご登録ください。登録は、ホームページのトップから